

“An Infinite Goal Behind The Stars”

A Passage to India 論

——特に第三部を中心に——

松 山 信 直

私はこの小論で、*A Passage to India* の第三部 “Temple” を中心にして考えてみたいと思う。この小説の第三部——Hindu 教の祭典が描かれ、Stella や Ralph の登場する第三部 “Temple” は、どのように受けとったらよいのだろうか。こんな素朴な質問は愚問に近いかもしれないが、第三部が小説全体に対してどのような関係にたっているかを考えてみることは、この作品の理解にとって、大切なことのように思える。

I

小説にとって story (物語) がどの程度本質的なものかの議論はさておくとして、作者は第一部 “Mosque” と第二部 “Caves” を通して、story を語っている¹⁾。その story の展開には、極めて概括的にいえば、次のような図式であらわされる人間関係がある。

個人的関係—社会的関係—個人的・社会的関係
(社会的関係) (個人的関係)

Aziz にとって、Mrs Moore との近づきや Marabar 洞穴行などの出来事は、個人的親近感にもとづくものだったが、実はその背後に、印度人対在印英人の関係という社会的意味がひそんでいた。洞穴行に端を発した裁判事件で、そのことをまざまざと知らされる。Fielding の Aziz に対する友情も全く個人的親近感から出たものだが、裁判事件で在印英人から離れて Aziz を弁護したため、彼もまた社会的な出来事の渦中にひきづり

こまれる。Miss Quested の場合も、Ronny との婚約・結婚という個人的関係を目的とした印度訪問が、Marabar 洞穴への遠足以後社会的意味をあらわし、彼女は印度人对在印英人の政治的事件の焦点となる。一部には、対人関係が社会的政治的關係へと広がってゆくことを拒否したり(Mrs Moore)、たくみに回避した(Godbole) 人物もいるが、この作品の story は、インドに於て人間と人間との間の関係が個人的なレベルに留ることの困難さを描いている。自然な衝動から生れた個人的な人間関係に於て、相互の信頼を保ち、自然な衝動の純粹さを保つことは、なかなか困難なのだ。

Aziz と Fielding の場合にしても、裁判のあと Miss Quested をめぐって Aziz に誤解が生じた。Quested に関する文化的・人種的背景にもとづく理解の差が、二人の間の友情と信頼をゆがめたのである。第三部で再び Fielding と Aziz が登場してきたとき、二人は表面的には和解し、以前の親しかった個人的な関係をとりもどしはするが、既に二人はそれぞれの社会的意識を持たざるを得ない人間に変貌している。Fielding は、Ronny からの手紙にみられるように(p. 303)、典型的な在印英人である Ronny を満足させるような人物になっていて、いつもこの州のゲストハウスから来るのと同じような手紙——何かが欲しいとか、何かを見たいという要求の手紙——を Aziz に出している(p. 290)。英国人の女性と結婚したことによって、彼も在印英人の制約を幾分身につけてきているのだ(p. 314)。一方の Aziz は、自分の詩の中では、もともと心から愛してもいない祖国から国際性 “internationality” (p. 289) へと向っていたのだが、Fielding と話を交して窮地にたつと、自分には祖国がある、祖国を持つべきだと想起して(p. 313)、愛国主義者的に「印度は一つの国家になるべきだ(p. 317)」と叫ぶ。それぞれの社会を意識するようになった二人の関係は、表面的には以前と変りない関係に戻ったかもしれないが、もう昔のような社会的なへだたりを感じさせないところに生れた関係ではなく、

社会的意識にたった上での友情である。

Forster はいくつかの小説に於て、個人と個人の人間関係の問題をとりあげてきた。I Blieve のなかで、business relationships と対照させて personal relationships の重要さを説いたことも有名だ。この問題が A Passage to India にも見えていることは、むろん、多くの人々が指摘した通りだ。けれども、personal relationships だけでこの作品を割切ることはいできないし、personal relationships が単なる交際や道徳に終るものではないことも明らかである。個人と個人の間のつながりには、友人・恋人・夫婦を問わず、相互の全人格的なコミュニケーションがなければならない。そのコミュニケーションを可能にしているのは、薄っぺらな理解、センチメンタルな同情、大げさな友情、盲目的愛情などではなく、個々の人間のヴィジョンの開拓である。個人の認識と自覚の深まりのないところには、深い理解も全人格的なコミュニケーションもない。A Passage to India の story の背後には、このような、人種的文化背景の差をこえた、個人の認識と自覚のテーマがある。それが第三部の存在によって非常にはっきりしてくるのではないかと思う。

II

第一部に於て設定された様々な人間関係が、そこに含まれている社会的・政治的意味の最も醜い一面をむきだしたり、或は、英雄的行為を生み出す裁判事件は、いわば、story 上の climax だった。ところが、この裁判騒ぎが Quested の告訴とりさげで終りをづけ、さまざまな人物が Chandrapore を退いたあとに開ける第三部は、story の上では、別れた Aziz と Fielding を再会させ、Aziz の誤解をといて Fielding と和解させるだけの機能しかもたない。story にとって、あきらかに第三部は anticlimax である。Fielding が Stella と結婚しているのもいかにも作為的だし、奇妙な Hindu 教の祭典、Fielding が蜂に追われていた時に Aziz と再会することや、二隻のボートがくつがえる事件などを考えれば、第三部は ba-

thos だとさえいえる。この作品が Santha Rama Rau の手で戯曲化されたとき、第三部の story を省略して第二部の裁判のシーンで幕をとじたのも、一理あるまとめかただった。³⁾

もし、第三部の機能が、第二部の終りで Aziz と Fielding のその後の行方に二分されたままで休止した好奇心の流れ——Forster は好奇心を、人間の諸能力の中で最も低級なものといっている⁴⁾——を充たすだけのものとするならば、第三部は、19世紀の多くの小説の結末がそうであったように、“Conclusion”あるいは“Postscript”として、一つの章に構成することもできた筈である。story 上の第三部の機能ははなはだ微弱なのだ。もちろん、私はここで第三部が無用だと言うのでもなければ、この作品の story に欠陥があると言おうとするのでもない。Forster は丁寧に、素直に、story を展開している。複雑ではないが彩りが豊かで、魅力ともり上りのある story である。けれども、Forster 自身のべているように、小説はたしかに物語をするが、それだけではないのである。⁵⁾

第三部“Temple”は、第33章の Hindu 教の祭典の描写ではじまる。この第三部の書き出しは、第一部“Mosque”が、第1章の Chandrapore の俯瞰的情景描写ではじまり、第二部“Caves”が、第12章の Marabar 洞穴の解説的描写ではじまったのと同じ構想だ。すなわち、その後続く部分で描かれる出来事や状況の場所を与え、それらの性格及び意味についての概念図を与えるためのものである。第三部で Hindu 教が重要な役割を果たしていることは言うまでもない。

Godbole が再び登場してくる。季節は雨期になっている。Mrs Moore が Mosque の中で Aziz に語った子供達、Stella と Ralph、も登場する。さらに、これまでさして重要な意味を持たないように思われた表現やイメージが、再びあらわれてくる。それらについては、いずれもう少し先で言及するが、このようなことなどから、第三部にいたって、この作品を律してきたのはサイクルと反復の二つの原理であったことが明確になる。For-

ster は *Aspects of the Novel* の中で自ら論じた plot の美的様相としての pattern と rhythm を、この作品ではっきり打出している⁶⁾。

Hindu 教が大きく扱われることになって、これで英国植民地としてのインドの代表的宗教三つが出揃い、ここで改めてそれまでに言及されていた回教やキリスト教、或は、知的無神論の機能に光があてられる。季節が雨期で、この三年間のうちで最も雨量の多いめぐまれた雨期であり (cf. p. 293)、豊作が予想されていることを知って、第一部、第二部の季節とその季節に於て起った出来事のむすびつきが改めて想い起され、この第三部の雨期で印度の一年の季節が一廻転して完成するのを知る。また、さして注意をひく存在でもなかった人物の登場によって、彼等がそれまでにどのような機能を果していたかを回想し、記憶をたどることによって新しい意味の世界が開けてくる。このようにして、我々は第三部にいたって、「知性と記憶力を要求する⁸⁾」と Forster のいう plot を強く意識するようになる。「plot の展開につれて、読者の記憶力は plot の上にたゆたい、新しい手がかりを求め、新しい因果のつながりを求めて、たえず配列しなおし、考え直すのだ⁹⁾」と Forster はいっている。いうまでもなく、第三部はこの作品の plot にとって重要な機能をはたし、この作品の意味と様式を完成するむすびとなっている。

III

第三部を圧倒的に彩っている Hindu 教は、第三部にいたって突然にあらわれたのではない。インドの歴史と政治に密接に結びついた Hindu 教の出現を期待させるものは、それまでに既に形づくられていた。だが、そこにはいくつかの曲折があった。第一部における Hindu 教乃至は Hindu 教徒への言及には、何か侮蔑的なもの、或は、消極的な意味がひそんでいた。それは、第一部が回教の寺院“Mosque”を表題とし、回教徒の Aziz の視点、彼の意識に基く狭い視野や、情熱的ではあるが矛盾の多い偏狭な彼の性格が重要な機能を果している故でもあった。「他の宗教の寺院、ヒ

ンズー教やキリスト教やギリシャ教の寺院は、みな彼 (Aziz) にとって屈であり、美感をそそらなかったろう (p. 20)」と書かれているし、Mrs Moore を招待する約束を無視した Bhattacharya 夫妻を、Aziz は Hindu 教徒ときめつけて激しく非難し、更に、同僚の医師 Panna Lal 博士の屈服的な態度をひどくさげすんでいる。第一部・第二部では、Hindu 教に関係した者はあまり肯定されるような面がない。もう一人の Hindu 教徒 Godbole 教授も、侮蔑的な面が少くない。彼は人にものを教えようとはせず、Marabar 洞穴行の遠足にもほとんど作画的に参加しなかったし、Aziz の裁判がはじまると、Fielding の期待を裏切って彼の学校を去ってゆく。彼の不干渉、不参加の態度は不可解ですらある。

けれども、一般 Hindu 教徒をさげすんでいるとはいうものの、Aziz は Brahmin である Godbole に、一応、敬意をあらわしているし、Marabar 洞穴への遠足では、Godbole がいないと眼前の景観の意味すらもわからない。さらに、Godbole の宗教詩や Fielding に語る善悪論は、必ずしもそれ自体では明解でないが、意味深い暗示をたたえているように思える。Godbole は Hindu 教への期待の、いわば、伏線のごとき存在だった。

ところが、Hindu 教への期待は、もう少し違った形で形成されてくる。回教徒 Aziz の偏狭さと同じように、無神論者と自称する Fielding や Quested の合理主義の限界と、キリスト教徒である Mrs Moore の蹉跎を背景にして、これ等と対照的に、小説の plot の context の上で浮びあがってくる期待がある。Godbole とおよそ対照的な Fielding の Aziz 裁判事件への積極的介入は、ヒロイックといえるほど立派だったし、Mrs Moore の暖かさや直観的洞察力は、それぞれ Aziz, Adela Quested によって高く評価された。それでも、この二人は、いわゆる code characters ではないし、美化された理想像でもない。

合理主義の冷静・寛容・善意を代表するような Fielding の積極的介入

の行為は、表面的には西洋的美徳と誠実さの典型として、在印英人の感情的な支配者然とした傲慢さと著しい対照を描いている。彼は Quested の印度を知ろうとする誤ちを指摘することもできたし、個人主義的教育に対する信念も強かった。けれども、無神論的合理主義者の彼は、ある点まで達するとそこから先へは進めない。Quested と同じく神秘を嫌い、「神秘とは単に混濁に与えた美名にすぎない (p. 68)」と簡単にわり切ってしまう彼の言葉は、彼にとって、人生や宇宙の謎をとときあかすどころか、その謎の存在を知覚することすらもほとんど不可能に近いことを示している。

Aziz の無罪を信じて英人のクラブから脱退した彼の行為は、それ自身の美しさに輝くような立派な行為だった。だが、クラブの二階のヴェランダに出て、夕映の最後の瞬間に輝く Marabar の丘を見たとき、丘は全世界と一つになり、全宇宙が一つの丘となる美しい瞬間にあったのだが、Fielding にはこの瞬間は顔をそむけて通りすぎてしまい、誰かがそんな瞬間があったと言うために、自ら経験しなかったのに信じざるを得なくなったと書かれている (p. 187)。彼は「事実 information は偉大だ、事実が勝たねばならぬ (p. 187)」という合理主義の精神に生きてはいたが、彼がいかに調査しても Marabar の洞穴の反響を説明することはできない。そのことに言及して、第二部の終近くで次のように言われている。

This reflection about an echo lay at the verge of Fielding's mind. He could never develop it. It belonged to the universe that he had missed or rejected. And the mosque missed it too. Like himself, those shallow arcades provided but a limited asylum. “There is no God but God” doesn't carry us far through the complexities of matter and spirit; it is only a game with words, really, a religious pun, not a religious truth. (p. 269)

この言葉は、一方では、Fielding のような合理主義的認識の限界について語るのと同時に、回教を名ざしてその狭さを指摘している。けれども、

“There is no God but God.” という一神論を抱く宗教は、回教だけに留まらない。この作品には、他にキリスト教も扱われているのであって、この言葉は、そのような「神の他に神なし」とする排他的神観に支えられた世界観が、精神と物質の錯綜を透視する認識として不充分であることをも意味している。事実、Mrs Moore が陥った精神状態がそのことを示している。

Mrs Moore はこの小説に登場する英人の中では、最も宗教的・霊的だった。国歌に神がうたわれているというので宗教を認めているような息子の Ronny とは全く異った宗教意識を、彼女は持っている。Mosque に入っても、“God is here.” と異教の神を神聖視するほど敬虔だったし (p. 21), Fielding と異って神秘を好むともいっている (p. 68)。彼女は Aziz の無罪を信じ、Quested の判断の誤謬を指摘できるほど、論理を超越した洞察力を持っている。けれども、彼女がインドに滞在してゆくにつれて、一方では神の必要を以前にもまして強く感じながら、他方では、神に対して次第に充ちたりた気持ちを感じられなくなってくる。そして、この精神的動揺は Marabar の洞穴の反響で遂に決定的な打撃をうけ、彼女の安心立命は崩壊する。

Marabar の洞穴、あるいは、そこで聞える反響は、たしかに、シンボリックな機能をもっている。けれども、だからといって、これ等を性急に単一の意味に還元することは賢明でない。作者はこの作品で、イメージそのものが持っている表現力を非常に有効に生かして使っている。従って、このイメージを簡単に抽象化することはイメージを記号にしてしまい、ちょうど、Herman Melville の *Moby-Dick* の白鯨を抽象的な意味に還元してみると、あの雄渾な作品が薄っぺらな allegory と化してしまうのと、全く同じ危険と誤を冒すことになる。いずれこの反響については一言ふれるが、今の場合、すでにゆらいでいた Mrs Moore のキリスト教への信仰がこの反響を経験して根底からくずれ、彼女の世界観がすっかりぼやけ

ただけ言っておこう。

But suddenly, at the edge of her mind, Religion appeared, poor little talkative Christianity, and she knew that all its divine words from “Let there be Light” to “It is finished” only amounted to “bourn.” Then she was terrified over an area larger than usual; the universe, never comprehensible to her intellect, offered no repose to her soul, the mood of the last two months took definite form at last, and she realized that she didn’t want to write to her children, didn’t want to communicate with anyone, not even with God. (p. 148)

Mrs Moore が陥った状態は、作者の言葉をかれば、初老の人によく訪れるという「映像が二重にぼけたそがれ (the twilight of double vision, p. 202)」であって、一種の「精神的混濁 (a spiritual muddledom, p. 203)」である。だがそれは、上の引用文でも明らかなように、poor little talkative Christianity と性格づけられたキリスト教の狭さと、その狭さに由来する無能さに根ざした精神的混濁である。先の回教の場合と同じく、はたしてキリスト教がそのようなものかどうかについては、多々弁駁の余地があるように思えるけれども、この作品に関する限り、宇宙は、poor little talkative Christianity が抱いている世界観よりもっと広大なのである。先に述べたように、“There is no God but God.”という排他的神観に支えられた世界観は、多様性と太古からの古さを誇るインドにみなぎっている精神と物質の錯綜を透視するには、あまりにも狭く、卑小なのだ。この地に来ているミッシェナリーは無力 (inefficiency, p. 98) であり、神の家に wasp をむかえるかどうかで論理の行きづまりをみせるほど浅薄である (p. 38)。

Mrs Moore は愛すべき老婦人だった。彼女がまだキリスト教の枠内に留まり得た頃は、親切で寛大で思いやりがあった。Aziz はそういう Mrs

Moore に会って感動したのだった。だが、彼女が印度を知るにつれて、彼女の精神生活を支えていたキリスト教的世界観の狭さの故に、彼女は次第に精神的混濁に陥り、Marabar 洞穴の反響を経験して以来、遂に決定的な打撃を受けた。彼女の死は、いわば、来たるべくして来たものだった。

このような Aziz, Fielding, Mrs Moore (そして、特に言及しなかったが、Fielding と同じ傾向を持ち、彼よりはるかに未熟な Adela Quested も当然加わっているが) の狭さ、限界、蹉跌にてらしてみても、はじめて、第二部の終り近くで Fielding が Aziz に向って語る言葉が、Hindu 教への積極的な期待として、plot の上で具体性と重要性をおびてくる。Fielding は Aziz に宗教詩人になることをすすめる、「宗教には、真実でないかもしれないが、まだ歌われていないものがある (There is something in religion that may not be true, but has not yet been sung. p. 270)」といい、おそらく Hindu 教徒がそれを発見しているのだが、彼等にはそれがうたえないのだと附言している。

Godbole が Fielding の学校でうたってきかせた名もない鳥の歌が、神に「来れ」と空しく呼びかけるだけであったことを思い起し、この Fielding の言葉の数頁先から第三部が始まっていることを併せて考えてみると、第三部は、うたえない Hindu 教徒にかかわって、これまで見逃されていた宗教のある面をうたっていると考えられることもできよう。いずれにしても、第三部に於て Hindu 教がとりあげられていることは、上にみてきたように、さまざまな宗教、或は世界観の問題と関係しているのである。第三部ではじめて登場する Stella と Ralph は、Hindu 教の形式面には関心がないが、Hindu 教が好きだという (p. 315)。それでは、第三部で描かれる Hindu 教とはどのようなものなのか、特にその精神面を簡単に眺めることにしたい。

IV

Hindu 教は一見統一があるかに見えておりながら、その実内部では、

無数の宗派、派閥があり、印度の歴史、政治と結びついて複雑な展開をしてきた。教義の細部は交錯し、教典も、有名な the Vedas の他にも沢山ある。そういう Hindu 教の複雑さ、及び、そのように複雑な Hindu 教を知ることの困難さについては、作中でも一言ふれている (p. 288)。このような Hindu 教を作者がどう理解しているかは、確かに問題である。「最もすぐれた教師について (Hindu 教を) 学んでも、頭をもたげてみると、教えてくれたことは少しもあてはまらないのを知るのが (p. 288)」とは、インドを二度訪れたことのある作者の実感かもしれない。しかし今の場合、我々にとっては、第三部に於て Hindu 教がどのようなものとして描かれ、それが作品全体の context の上でどのような機能と意味をもっているかが大切なのだ。別の言葉でいえば、既に言及した Hindu 教への期待が、回教、キリスト教、或は、合理主義的無神論との対比の許で、どう充されているかということが焦点なのである。

インド西北部にある街 Mau の Hindu 教の精神面の特色は、他の宗教や世界観との対比の上で次の 5 点に集約することができると思う。すなわち、(1) 神の超時間性と超空間性、(2) ユーモア性、(3) 無限愛、(4) 非排他性、(5) 模倣と代用、の 5 点である。

1) 神の超時間性と超空間性は、恐らく、ほとんどすべての宗教に共通した特色である。だが、Hindu 教の神の誕生にあたっては次のように言われている。

God is not born yet —— that will occur at midnight —— but He has also been born centuries ago, nor can He ever be born, because He is the Lord of the Universe, who transcends human processes. He is, was not, is not, was. (p. 279)

この一見パラドシカルな神の規定は、神は、常に、永遠の現在という神の時間に於て存在するとの考えと著しく対照的である。しかし、この神の概念は、Godbole と Fielding の間にかわされた善悪論の中で言及して

いる神の存在を参照すれば、明らかになるだろう (cf. pp. 174-5).

Godbole は善と悪はその名の示すごとく別物だが、一方では神が存在し、他方では神を欠くと説明し、神を欠いていること (absence) と、神が存在しないこと (non-existence) とを区別した。神は永遠に、人間の次元をこえて存在するが、欠けることもあるという。神を欠くとは、もちろん、人間の次元で神の存在が知覚できず、神の祝福を得ていないことであるから、神への祈りは、Godbole がうたったように「来れ、来れ、来れ」という呼びかけになる。“was not” “is not” とはそういう神の absence を指すと思われる。そして、神が absence の状態から presence の状態になることが神の誕生である。すなわち、Mau に於ては、神霊の一つ Vishnu がその第八化身である Krishna 神の姿となってあらわれることを誕生として祝っている。Krishna 神の誕生以前に神が存在しなかった (non-existence) というのではない。“He is, was not, is not, was.” というパラドクシカルな表現は、化身として神が出現するという考えにもとづいているのである。

2) Hindu 教のユーモア性は、キリスト教にみられないものとして、次のように言われている。

By sacrificing good taste, this worship achieved what Christianity has shirked: the inclusion of merriment. All spirit as well as all matter must participate in salvation, and if practical jokes are banned, the circle is incomplete. (p. 284)

この言葉の導入は、もちろん “the divine sense of humor (p. 284)” のあらわれであるけれども、上の引用文に明らかなように、万物一切を救済する神の包括力の広さから出たものである。従って、理念の上では次の項目、神の無限愛に含まれるべきものであろう。

3) 「無限愛」神の愛は無限であって、万物一切衆生に区別なく及ぶ。神が現れると (すなわち、Krishna 神が誕生すると) 「インド人のみなら

ず、外国人、鳥、洞穴、鉄道、その他星にいたるまで、あらゆる悲しみは消滅した。ものはみな喜と化し、笑と化した。病苦も、疑惑もなく、誤解も残虐も恐怖もなかった (p. 283)」と言われている。

神の愛はほとんどの宗教に見られる特色であろう。ペルシヤ語では神をあらわすのに「友 The Friend (p. 270)」と呼んでいると Aziz は説明している。けれども、Hindu 教の場合、その愛は非常に広大で、無差別で、生物無生物を問わず、文字通り、万物一切衆生に及ぶ救となってあらわれるところに特色がある。神から出た愛の救いには、ユーモアさえ含まれていることは上に述べた通りである。

Krishna の誕生に言及した一節に次のような表現がある。

Infinite Love took upon itself the form of Shri Krishna, and saved the world. (p. 283)

Mau の Hindu 教徒があがめる神 Krishna には、例えばキリスト教の如き、愛が神の性質であるという表現はあたらない。Mrs Moore がためらいながらも発したような God ... is ... Love. (p. 51) ではなく、無限愛 Infinite Love という精神が Krishna の姿となってあらわれるのであって、「愛は神 Krishna である (Love is God.)」といった方が正しい。従って、「無限愛」の化身である Krishna を崇拝することには、愛をあがめる意味合いがある。

Hindu 教の祭壇の神をたたえる言葉の中には、神の普遍性を示すために英語で書かれたものもあったが、それは God si Love. (p. 281) と誤って書かれていたという。たしかに、“is” とあるべきところを“si”と誤ったのは、インドに於ける form の混乱を示す一例である。事実、その意味でこの表現はアイロニカルに数度繰返されている。しかし、God や Love などを間違えず、最も簡単で容易な語を書き誤ったのは奇妙なことだ。“is” が“si”と書かれることによって主語と補語の機能が入れかわると考えるならば、God si Love. という奇妙な言葉は、上にのべたような Kri-

shna にふさわしく右から Love is God. と読めるからである。

それはともかくとしても、「無限愛」の化身としての Krishna の誕生を祝う Mau は、愛に充ちている。当然非排他性がみられるのである。

4) Krishna の誕生を祝う Mau の街は愛とよろこびにあふれている。だが、それは必ずしも一時的なものではなく、「無限愛」が Hindu 教徒の間に滲透し、巨大な包容力が生れているからである。Aziz をやとった藩主は Hindu 教徒も以前ほど排他的でなくなったことを認めているし (p. 290), かつて回教徒の虜囚を救って Hindu 教徒に首を切られた回教徒の聖人が、「首の社」と「胴の社」に分けてまつられ、今日では Hindu 教徒ですらこれをおがんでいるという。それはかつて Mrs Moore が女神 Esmiss Esmoor として祭られたのと同じく、愛の包容力の大きさと迷信深いといえるほどの宗教心の厚さによるものである。Mau には信仰上の排他性は全くない。そのことについて、次のように言われている。

“There is no God but God”; that symmetrical injunction melts in the mild air of Mau; it belongs to pilgrimages and universities, not to feudalism and agriculture. (p. 292)

“There is no God but God.” という偶像崇拜を禁止する排他的一神教の教義は、既に言及したごとく、religious truth ではなく、religious pun だといわれていた (cf. p. 269)。ここで再び我々はこの表現が引き合いに出されたのを見るのである。Mau の Hindu 教にはそのような排他性、偏狭さはない。もともと Hindu 教は多神教であった。Vishnu はいくつかの化身としてあらわれたと考えられているし、Vishnu の他にも神霊はあった。神々の間にいさかきが無かったわけではないし、他教の、あるいは、他神の信者迫害が無かったわけではない。けれども、多神教特有の包容力と「無限愛」が Mau に非排他的な空気を作りだしたのである。

5) 「模倣と疑似」(“imitations and substitution,” p. 285) は、「無限愛」、化身、非排他性、ユーモア性とからんで祭典の行事にあらわれて

いる。愛が神ならば、愛の精神を抱き、めぐみを他に与える者は神を模倣していることになり、しかも、神を模倣することは禁じられてもいない。人々が喧嘩をすることもなく供物をうばいあう様について、次のように書かれている。

There was no quarrelling, owing to the nature of the gift, for blessed is the man who confers it on another, he imitates God. (p. 285)

また「疑似」は、子供を Shri Krishna に見たてた遊戯にあらわれている。

...They played another game which chanced to be graceful: the fondling of Shri Krishna under the similitude of a child. A pretty red and gold ball is thrown, and he who catches it chooses a child from the crowd, raises it in his arms, and carries it round to be caressed. All stroke the darling creature for the Creator's sake, and murmur happy words. (p. 284)

上に簡単に要約した Hindu 教の精神面、あるいは、第三部でもっと具体的に描かれている祭礼などについて、批判がないわけではない。神の誕生そのものまでが、「(我々の言うような) 混濁であり、理性と形式の蹉跎 (a muddle [as we call it]; a frustration of reason and form, p. 280)」に他ならないとさえ言われている。また、科学を越え、歴史を越え、論理を止めて「神と共にある」と感じた際の、神の永遠の現在と人間の有限の現在との神秘的合致は、実は、神の時間の否定を意味するのではないかと考えることもできよう。例えば、ある箇所には次のような批判がある。

But the human spirit had tried by a desperate contortion to ravish the unknown, flinging down science and history in the struggle, yes, beauty herself. Did it succeed? Books written afterwards say “Yes.” But how, if there is such an event, can it be remem-

bered afterwards? How can it be expressed in anything but itself? Not only from the unbeliever are mysteries hid, but the adept himself cannot retain them. He may think, if he chooses, that he has been with God, but as soon as he thinks it, it becomes history, and falls under the rules of time. (p. 283)

このような批判は、あきらかに、合理主義の立場からのものであって、既に引用した Fielding の言葉——「神秘とは単に混濁に与えた美名にすぎない (p. 68)」——の趣旨を反復したものと言うことができる。この批判に対して、神秘主義の立場、あるいは、Hindu 教の立場から反駁することもできるだろうが、問題は、どの立場に絶対的な価値があるのかどうかではなくて、上に述べた特色を持っているとされた Hindu 教が、どのように作中で機能しているかということである。すでにみたように Hindu 教は、「無限愛」、包容力の大きさ、非排他性などの点で、キリスト教、あるいは回教と著しく対照的であった。のみならず、Hindu 教は、その神の誕生による廣大無辺の救いを通して、もっとこの小説の plot に深く織込まれてくる。ここで我々は Hindu 教が好きだという Stella と Ralph の二人の人物に眼をむけなければならない。二人がどのように Hindu 教に結びつき、その結びつきからどのようなことが考えられるかをのべなければならない。

V

Stella と Ralph の第三部に於ける登場は、表層の story からみればほとんど必然性がない。まして、Fielding と Stella の結婚は、Fielding が Mrs Moore をさして好いてもおらず、Mrs Moore とおよそ異質的な人間であるだけに、論理性がなく、作為的との印象さえ与える。しかも、二人の結婚は、この作品に登場する主要人物たちの不完全な、不幸な結婚と同じく（例えば、Aziz は妻に先立たれ、Mrs Moore の二度の結婚は二度とも夫に先立たれ、Ronny と Quested の婚約は失敗に終わっている）、

何か不幸な暗い影があった。

Fielding は、自分が妻を愛しているほどには妻が自分を愛していないことを知り、妻を悩まして自分を恥じていた (p. 313)。ところが、この Hindu 教の Mau に来て事態は一変した。それまで落着きがなかった Stella と Ralph は落着いた。Stella は以前からあった悩みを解決し、Fielding は二人の間の結び目——「あらゆる人間関係に必要な、双方の当事者の外にある結び目 (pp. 313-4)」——がみつかったような気がしたといっている。

ところが、そうはいうものの、なぜ Stella と Ralph が落着がなかったのかについて、あるいは、Stella の悩みが何であったのかについて、作者は一言も具体的に語っていない。のみならず、第三部全体を眺めても、Stella に関する描写は極めて少く、読者に訴える Stella 像は極めて具体性にとぼしい。Stella は決して story の上で重きをしめる人物ではない。彼女は機能的な人物——対照によって他の出来事や人物をひきたてたり、他にはたらきかけることによって、はたらきかけられた人物の特色がおのずから示されたり、何等かの変化・影響を他におよぼしたりする人物——に留まっている。Fielding は妻の Stella について Aziz に次のように語っている。これは Stella に関する僅かな描写の一部だが、Stella についての説明だけに意味があるのではない。

She has ideas I don't share —— indeed, when I'm away from her I think them ridiculous. When I'm with her, I suppose because I'm fond of her, I feel different, I feel half dead and half blind. My wife's after something. You and I and Miss Quested are, roughly speaking, not after anything. We jog on as decently as we can, you a little in front —— a laudable little party. But my wife is not with us. (p. 313)

この言葉は Stella について語ってはいるが、同時に、三人の大学出の

インテリ、Aziz, Fielding, Quesed の限界をも語っている。Fielding は別のところで Stella の弟 Ralph に言及して、Ralph は Stella より少しおけているが、Stella と共に進んでいると言っている (p. 314)。Stella や Ralph が何を求めていたかについては何の言及もないが、問題は、Aziz, Fielding, Quesed の三人が、彼らと異って何も求めていないことにある。もっと厳密に言えば、この三人は求めることを放棄したのではなく、求める能力と資格を欠いているのだ。すでに Fielding の無神論的合理主義の限界については一言ふれたが、ここで再び、あらたに出現した Stella と Ralph との対照のもとで、三人の知識人の限界が問題となってくる。

Fielding と Quesed が裁判後に語り合う場面に、次のような一節がある。二人は洞穴の事件について語り、Mrs Moore についても語る。二人は Aziz は無罪だといった Mrs Moore の理解力をとりあげ、telepathy と説明してみるが、不満足を感じてすぐひっこめる。

She was at the end of her spiritual tether, and so was he. Were there worlds beyond which they could never touch, or did all that is possible enter their consciousness? They could not tell. They only realized that their outlook was more or less similar, and found in this a satisfaction. Perhaps life is a mystery, not a muddle; they could not tell. Perhaps the hundred Indias which fuss and squabble so tiresomely are one and the universe they mirror is one. They had not the apparatus for judging. (p. 256)

先の Stella の描写と較べてみると、ここにのべている二人の合理主義者の限界は、いっそう極立ってくる。更に数行先で、二人が別れの握手をかわしたあとではこう書かれている。

A friendliness, as of dwards shaking hands, was in the air. Both man and woman were at the height of their powers — sensible honest, even subtle. They spoke the same language, and held the

same opinions, and the variety of age and sex did not divide them. Yet they were dissatisfied. When they agreed, “I want to go on living a bit,” or, “I don’t believe in God,” the words were followed by a curious backwash as though the universe had displaced itself to fill up a tiny void, or as though they had seen their own gestures from an immense height—dwarfs talking, shaking hands and assuring each other that they stood on the same footing of insight. They did not think they were wrong, because as soon as honest people think they are wrong instability sets up. Not for them was an infinite goal behind the stars, and they never sought it. But wistfulness descended on them now, as on other occasions; the shadow of the shadow of a dream fell over their clear-cut interests, and objects never seen again seemed messages from another world. (p. 257)

ここでは Fielding と Quested が「小人」(dwarf) に擬されている。この小人のイメージは、Mrs Moore が精神的混濁に陥った時にあらわれたキリスト教のイメージ、“poor little talkative Christianity”を想起させる。このキリスト教のイメージの如く、二人の合理主義者は、宇宙の広大さからみれば、ほんの小人に過ぎず、二人の交す言葉は空しくうつろである。それは、この二人の合理主義者的認識が限られ、人生や、宇宙や、錯綜したインドについて、神秘か否かの「判断の手がかり」(the apparatus for judging)が全然なく、二人が「星の彼方の無限の窮極」にかないえない人間だからである。

この広大なゴール、an infinite goal behind the stars が何であるかについて、作者は黙して語らない。しかし、星の彼方、あるいは、空の背後、というイメージは、他の箇所でも何度か使われていた。例えば、第1章の Chandrapore の俯瞰図では、夜の空に言及して次のように書かれている。

Then the stars hang like lamps from the immense vault. The distance between the vault and them is as nothing to the distance behind them, and that farther distance, though beyond colour, last freed itself from blue. (p. 10)

また、第5章では、インド人と在印英人の間の交際を深めるつもりのリッジ・パーティが首尾よく進行しないことを述べて、空が先の例よりもっと比喩的に、次のように描かれている。

Some kites hovered overhead, impartial, over the kites passed the mass of a vulture, and with an impartiality exceeding all, the sky not deeply coloured but translucent, poured light from its whole circumference. It seemed unlikely that the series stopped here.

Beyond the sky must not there be something that overarches all the skies, more impartial even than they? Beyond which again.... (p. 40)

この例からみて明らかなように、空の彼方の空——眼にみえる単なる空ではない——、星の背後の無限の拡がりでは、一切が平等で不平がなく、万物が喜であり歓喜である。そこは現実を離れ、人間の俗臭を超脱してはいるが、必ずしも、人間の世界と無縁ではない。人間の世界は遙か下に小さく、卑しく、醜く存在するのだ。

その意味で an infinite goal behind the stars は様々に解することができよう。それは「宇宙の窮極としての永遠の歓喜」「法悦無窮」といった表現であらわすことができようし、「絶対至福の真理」「愛としての宇宙の根本原理」といった言葉でもあらわすことができよう。いずれにしても、人間に精神、靈魂、といった眼前の現実を超脱するものがあるとすれば、それらが窮極的に指し向っているものと考えることができる。

あきらかにこの goal は宗教的な経験として把握されるものであって、rational に教えられて到達できるものではない。Fielding も Quersted も

共にそのような精神的宗教的経験には縁遠い人間だった。Azizにしても、彼の宗教の枠内でこそそのような窮極を求めていたかもしれないが、既にのべたように、彼には著しい偏狭さがあった。一方 Mrs Moore は、Fielding や Quested にはない霊的経験の持主であり、彼女の信じたキリスト教の枠内では、神の恵を通してこの窮極に向っていたかもしれない。しかし、結局、キリスト教の狭さの故に彼女が精神的混濁に見舞れたのは既にわれわれのみたところである。洞穴の反響を経験し、キリスト教の教義や信仰が“boum”に帰した時にあらわれた宇宙は、キリスト教の枠内で考えていたものより大きかった。既に引用したように、

... She was terrified over an area larger than usual; the universe, never comprehensible to her intellect, offered no repose to her soul, ... と書かれている。

この作品で重要な働きをしている Marabar の洞穴の反響は、この infinite goal, あるいは、宇宙の大きさとの関連のもとで、一つの意味をもってくる。反響 echo とは、物理的には、障害物によって音波の拡がりが増え、阻止され、はねかえってくることである。しかし、精神的には、宇宙の大きさの認識、infinite goal といった窮極への憧れと昇華を阻止し、卑小さと有限の枠内に人間をとどめようとするものである。だが、広大な宇宙に対する自己の卑小さをはじめから自覚している者にとっては、反響は全く無害である。反響が何か悪影響をもたらし、破壊的な力をもってくるのは（事実そのように何度も描かれているが）、偏狭で卑小でありながらそのことを自覚せず、謙虚でない人、別の言葉でいえば、infinite goal を求め得ない人間に対してである。その意味では、Godbole は自己の卑小さを充分深く認識している人物だった。Hindu 教の祭典で踊りながら、ふと彼の意識に Mrs Moore と一匹の黄蜂 wasp が浮んできた。

“One old Englishwoman and one little, little wasp... It does not seem much, still it is more than I am myself. (p. 286)

と彼は自己を低くして考える。Godboleはこの作品で洞穴や反響の意味を知っているとされた唯一¹⁰⁾の人物である。

ところで, Stella と infinite goal の関係はどうであろうか。先に述べたように, Stella の悩みの実体は明らかでないが, Mrs Moore の膝許で長く育てられてきた子供として, 異父兄に当る Ronny と全く異った宗教的関心をもっていたことは容易に推測されるし, Hindu 教が好きだということから窺えるように, そと Mosque に入ってみた Mrs Moore より以上に, インドの精神面への積極的な関心を示し, それだけに, かなりの予備知識を持ち, 偏狭さととらわれていなかったといえる。彼女はインドへ来た当時の, 好奇心に動かされて知的にインドを知ろうとした Quested とは全然異質の人間だった。Stella の描写が具体性を欠くため, Stella の求めたものがこの infinite goal だと断定することはできないにしても, 彼女の輪廓や, infinite goal を求め得ない Fielding と Quested との対照から考えるならば, 少なくとも Stella はこの goal を求める資格があったということ是可以する。彼女は星の背後のゴールを求めうる人として, ラテン語の星からきた Stella という名が与えられていたとも考えられる。

VI

An infinite goal behind the stars にかなう Stella と「無限愛」の Hindu 教は, 極めて意義深く, Hindu 教の祭典のクライマックスに於て出会う。Mau の貯水池でのボートでんぶく事件がそれである。夫に連れられた Stella と, Ralph をつれた Aziz とは共にボートにのって, 池の上から Hindu 教のお渡りの儀式を眺めていた。その時二隻のボートは接触した。更にそこへ, 池に流された Hindu 教の盆——Krishna 神の生れた村の模型をのせた盆——が衝突する。Stella はいったん夫の腕の中にちぢみこむが, すぐさま手をのばして Aziz に向かってとびついた。この行動のためボートはでんぶくし, 四人は浅い水中に投げ出されてしまった。

Hindu 教の盆がボートに当たった箇処が, 他の人ではなく, Hindu 教が

好きだという Stella に一番近かったというのは (p. 310), Ralph と Aziz の乗ったボートが, Ralph に導かれて Hindu 教の藩主の父の像がみえる池の中のただ一つの地点に来たのと同じく、極めて象徴的だ。同時に, Stella がとっさに夫から Aziz に向った行為も象徴的だ。Stella の母 Mrs Moore は Aziz の「心の奥底にしるびこんでいた (p. 307)」のに反し, Fielding は Mrs Moore をさほど好いてはいなかった。Stella は母に向けられた親しみと愛に、無意識のうちにむくいていたのかもしれない。しかし、それより以上に, Stella の行動は、つい先ほど弟の Ralph が、知らない人が友人であるかどうかがわかるとって Aziz に親しみをみせた行為 (cf. p. 306) との連関が濃い。Stella と Aziz はこのときが初対面だったのだ。そして、この二人の行為は、Mrs Moore がはじめて Aziz と会った時の、あの Mosque 中の情景を想い起させる。Stella と Ralph も、かつての、良き日の Mrs Moore と同質の包容力と非排他的な愛の持主だったといえるのではないか。二人は、精神的混濁に陥る前の Mrs Moore の延長線上にあるといえる。だが、Aziz とこの Mrs Moore の子供達との出会いは、“Mosque, cave, mosque, cave” (p. 306) と Aziz が感じたような不幸な事件をひき起したパターンの繰返しではない。舞台は Moslem の寺院でもなければ Chandrapore でもなく、既に、Hindu 教の藩主領の Mau に移り、Hindu 教の祭典がめぐまれた雨期に行われていて、その精神面がムード的に背景にあるからである。

盆を流したとき Hindu 教の祭典はクライマックスに達していた。その神の誕生は、すでにみた Hindu 教の最も特色のある、非排他的な、包容性の大きい「無限愛」のあらわれだった。念のために先に引用した文章を繰返すと、神が生れると「インド人のみならず、外国人、鳥、洞穴、鉄道、その他星にいたるあらゆる悲哀は消滅した。ものはみな喜と化し、笑と化した。病苦も、疑惑もなく、誤解も残虐も恐怖もなかった (p. 283)」といわれていた。ここに言及されているいくつかのイメージは、それぞれす

でに作中に出現したものばかりである。何度か鳥に言及があったし、Marabar 洞穴へ行く鉄道は精神的無感覚状態を形づくるように単調な音をひびかせて Aziz の一行を運んでいった。Quested や Mrs Moore がその状態にとりつかれていたことが、洞穴内での一連の異常な出来事と結びついていったのだ。そして、星も何度かあらわれた。従って、Hindu 教の神の誕生はこれまでに作中に現れたもの一切を救ったのだ。無生物のみならず、遠く星まで救の対象にする「無限愛」は、宇宙をあまねく広く包むといわねばならない。その愛は、an infinite goal behind the stars と同じ次元の、同じ価値を持つのである。

Hindu 教の神の誕生によって、様々な事件を生み、めまぐるしく展開していった人間関係の悲しむべき誤解はとけ、一切はよろこびと化した。祭典をむかえていた Mau の街自体が「猜疑や我慾 (p. 300)」から浄化されていたのである。四人はこの Hindu 教のクライマックスに Mau の貯水池にはまりこみ、一切衆生を救済する Hindu 教の神の恵を得たのだ。文字通り、醜いもの、誤解が水に流されて清められたのだ。

After the funny shipwreck there had been no more nonsense or bitterness, and they (i. e., Fielding and Aziz) went back laughingly to their old relationship as if nothing had happened. (p. 312)

と作者は書いている。しかもこの貯水池の水は、この三年のうちで、すなわち、この小説が書き起され、さまざまな事件が起きた三年のうちで最も雨量の多い、すばらしい雨期 (cf. p. 293) のめぐみと豊饒の水なのだ。ボートのでんぶくは、いわば洗礼ともいえる清めの儀式、しかも、Hindu 教的なユーモアのある儀式だった。この儀式で Stella と Ralph が先導と司祭の役割ともいえる行為を果したことは言うまでもない。

とはいっても、Hindu 教の祭典のクライマックスと重なったこの事件は、劇的緊迫感の積重ねの上に起ったものではないし、また、必ずしも rational に説明される必然性の上に立つものでもない。祭典のクライマッ

クスとこのてんぷく事件を描いたあと、作者は次のように結んでいる。

That was the climax, as far as India admits of one... The singing went on even longer ... ragged edges of religion ... unsatisfactory and undramatic tangles ... ‘God si love.’ Looking back at the great blur of the last twenty-four hours, no man could say where was the emotional centre of it, any more than he could locate the heart of a cloud. (pp. 310-311)

Stella と Ralph の Hindu 教との出会いにしても、いかにも偶発的な出来事を通してであり、象徴的な出会いであった。

Stella と Ralph は決して story 上に重きをしめる人物、ドラマの主役となる人物ではない。Fielding, Aziz などにとって一種の foil character であるに過ぎない。同時に、この作品は Hindu 教を全面的に肯定しようとしているのでもなければ、まして、Hindu 教にインドの政治的・社会的問題の解決の糸口が見出されるというのでもない。Stella と Ralph が foil であるごとく、Hindu 教も、回教やキリスト教、或は、知的無神論に対する対照の機能が強調されているのだ。これらの世界観に対して、Hindu 教の精神面はたしかに一つの可能性としてかなり関心深く眺められ、第三部に描かれる出来事の意味に深く織込まれているが、Hindu 教への疑義が決して無いわけではなかったように、全く余すところなく信じられ、価値あるものとみなされているのではない。

もともと作者はこの作品に於て、様々な世界観の可否を問うているのではあるまい。様々な世界観が関係しているとすれば、それは人種・宗教・文化的背景を異にした様々な人物の自覚と認識に関係するものとしてである。作者が描いたのは、自覚と認識の深浅によって結びついている人物たちの関係であった。複雑な要因に支配されている人間関係に於て、心と心が触れ合う純粋さをたもち、全人格的なコミュニケーションを成立さすのには、現実の泥沼を見透し、物質と精神の錯綜をほぐす自覚と認識の深まり、ヴ

ヴィジョンの開拓が必要である。Stella や Hindu 教はこの点で、およそ rational なものと縁遠い一つのアプローチとして意味を持ってくるのである。なるほど Fielding と Aziz は和解してわかれた。寛容と友愛の美德はささやかな果を結んだかもしれない。けれどもその和解は、Hindu 教や Stella や Ralph などの外部からの働きかけや偶発的な事件によって起ったものであって、必ずしも二人の自覚の深まりから学びとったものではない。二人のヴィジョンにはまだ an infinite goal behind the stars は映っていないと言わねばなるまい。

それにしても、この二人に自覚の深まりが全然なかったというのではない。在印英人的になってきた Fielding が、妻の Stella を理解することによって自分が持たないものにめざめ、Hindu 教の精神面への関心を示しはじめていることは (p. 314)、彼のヴィジョンの深まり、彼自身の使っている言葉をかれば、revision (p. 273) にとって、一つの曙光といえるかもしれない。一方の Aziz は、政治的にはめざめたが、Fielding ほどにも Hindu 教によって自覚を深めようとする気配はない (cf. p. 315)。ただ、彼が排他心をやわらげ、寛容を学んだことは一つの収獲だった。

だが作者は an infinite goal behind the stars がどのようにして、どこで求められるかについて、黙して語らない。作者に分明でないからかもしれないし、この goal の性質上 rational に語ることの不可能さを知った上で、さながら Godbole の如く口を噤んだのかもしれない。だが、この作品に於ける作者の関心は、Stella や Ralph が主役でないことから窺えるように、Fielding や Aziz などが密着している現実的・社会的なレベルにあったのだ。ただ作者はその際、現実的・社会的レベルのみに安住しなかったのである。作者は彼方を見透しつつ、現実を眺めていたのだ。インドが政治的に独立し、インド人がイギリス人と肩を並べる時期がきても、解決されない問題はある。この infinite goal をみきわめるヴィジョンの開拓が、例えば、それである。Fielding と Aziz が今友達になれないこ

とを描いた結びの言葉の最後に空が引出され ...and the sky said, ‘No, not there’ (p. 317) とあるのは、そういうインドだけにしばられていないこの作品の奥行を語っている。

× × ×

すでに私は、この小論の結語を語ってしまったようだ。Whitman の詩 “Passage to India” に表題をかりたこの作品が、Whitman の詩ほど抽象の世界に飛翔することなく現実に密着し、それでいて、現実の錯綜にまぎれることなく深い意味の世界を展開しているのは、単なる技巧ではなく、深い洞察に裏付けられた柔軟な創造力の働きという外はない。Hindu 教の祭典が詳細に描かれ、異国情緒にあふれている第三部のみならず、この作品全体が、風俗小説としても、また、いくつかの意味のレベルを持った、精密な象徴的作品としても興味深く読めるのはそのためであろう。

注

- 1) Forster は story を次のように定義している。
It is a narrative of events arranged in their time sequence. (*Aspects of The Novel* (“Harvest Books”; New York: Harcourt, Brace & Co., c 1954), p. 27.) Lionel Trilling は Forster 論の中でこの Forster の定義した story と plot をほとんど逆の意味で用いている。(Cf. *E. M. Forster* (London: The Hogarth Press, 1959), p. 126.) 以下本文中の story, plot は Forster の用いた意味で用いている。
- 2) Cf. *I Believe—The Personal Philosophies of Twenty-Three Eminent Men and Women of Our Time* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1940).
- 3) Cf. *A Passage to India, A Play* by Santha Rama Rau (New York: Harcourt, Brace & World, c 1960).
- 4) *Aspects of The Novel*, p. 86.
- 5) *Ibid.*, p. 42.
- 6) Cf. *ibid.*, Chap. VIII.
- 7) Cf. “Author’s Notes,” Everyman’s Library edition.
- 8) *Aspects of The Novel*, p. 86.
- 9) *Ibid.*, p. 88.
- 10) wasp のイメージはこの他 Mrs Moore とミッシェナリーに関係して出てくるが、いずれも、関係する者の包容力の大きさと自己の卑小さの認識に結びついていることに注目したい。Cf. pp. 35, 38.